

雨夜の逢引

—平安朝の恋愛文化という側面から—

都基弘*

(e-mail : miyako101@yahoo.co.kr)

目次

1. はじめに
 2. 男女の認識の差
 3. 男の思い
 4. 女の思い
 5. 口説き文句としての変奏
 6. まとめ
-

1. はじめに

平安朝の仮名文芸作品に用いられている「つれづれ」の用例をみると、雨と関わる場合が多い。それは『古今集』の617番歌以来の伝統で、和歌だけではなく、物語や日記、随筆にも共通していることである。その『古今集』の617番歌の「つれづれのながめ」における「ながめ」については、「五月雨」であるかは不明であると解するのが一般的である¹⁾。

ところで、折口信夫は『古今集』の617番歌の前の616番歌における「ながめ」を「ながめいみアマツから出て固定した語で、五月の「雨期アマツ度み」と言ふ語がある以上、ながめいみは、霖雨期に当っての、禁欲・不外出のつれづれを思ひ沈む、成年男子の毎年の経験

* 한남대학교, 시간강사, 일본고전문학(중고).

1) 藤岡忠美 (1976.6) 「長雨」『国文学』21-7, 145頁。

から来て、ながめと略しても訣る程、広く久しく用ゐられて居た様である」²⁾と説く。

上記のような折口信夫の説に影響され、平安朝の「ながめ」については「隔離された男女の生活の、みたされぬ思い」³⁾とか、「雨夜に肌触れることを禁忌とした民間習俗が、後期王朝の貴顕の人々の心にも確かに生き続けていたからに外なるまい」⁴⁾とか、「霖雨期におけるもの忌みの生活、すなわち「ながめいみ」の意味にもなっている」⁵⁾とか、「ながめの文学は、縷述するまでもなく、いかに相思相愛の男女であろうと、雨の降る夜には互いの肌を触れ合うことを禁忌とする、いわゆる長雨忌み・雨慎み・雨隠りの習俗を基盤にして発生・成立した文学である」⁶⁾とか、「長雨の降り続くころ男女の共寝があつてはならぬとする禁忌の習俗である」⁷⁾とか、「雨夜の逢引は禁忌であつた」⁸⁾とする諸説が出されている。

ところが、折口信夫の説では「つれづれ」と「ながめ」について触れていて興味深いのが、二つの問題点がある。一つ目は、折口信夫が「ながめ」の用語例として挙げている『古今集』の616番歌の詞書には「弥生の朔日より」となっており、歌には「春のものどてながめくらしつ」となっていることである⁹⁾。つまり、『古今集』の616番歌において「五月雨」と断定しうる語は見当たらないのである。

二つ目は、後世のいわゆる「雨夜の逢引は禁忌」説の根拠となる「雨期度み」という習俗が実際にあったかどうかということである。『万葉集』における「雨障」の訓の用字例と、雨に関する歌144首とを検討した川村幸太郎によると、「旧訓通り「あまざはり」と訓ずべき」ことと、「「雨乍見」は所謂呪的な畏怖感からの家籠りではなく、衣服の濡れることや健康を害するという雨の障碍を避ける為のものであつた」¹⁰⁾という。ただし、氏は「慣

2)折口信夫(1965)「古代民謡の研究」『折口信夫全集』第1巻、中央公論社、488頁。なお、引用に当たり、旧字体を新字体に改めたところがある。

3)池田弥三郎(1966)「雨の詩恋の歌」『文学と民俗学』岩崎美術社、10頁。池田弥三郎氏が折口信夫説の影響を受けたことは、引用した論文の217頁以下を参照されたい。

4)林田孝和(1967.8)「源氏物語における「月光」の設定(二)」『国学院雑誌』68-8、45頁。

5)西村亨(2000)「王朝びとの夏」『王朝びとの四季』第19刷、講談社、132頁。なお、西村亨氏は『古今集』の616番歌における「ながめ」を「春のながめ(長雨)」としている。

6)林田孝和(1980)「「ながめ」文学の展開」『源氏物語の発想』桜楓社、61頁。

7)鈴木日出男(1995)「雨」『源氏物語歳時記』ちくま学芸文庫、195頁。

8)古橋信孝(1990.3)「雨夜の逢引(上)」『月刊言語』19-3、11頁。

9)藤岡忠美(注1に同じ。145頁)も『万葉集』における「ながめ」の3例は「いずれも長雨を意味するにとどまり、外界を眺望する「眺め」の語は一例も見あたらない」と指摘している。

10)川村幸太郎(1983.7)「「雨障」と「雨乍見」」『日本文学誌要』第28号、17頁。

習としては「神の祟りを怖れ慎む」などと言い継いだろうことは想像される」とし、「誰もが信じているわけではないのに、風習としては残っている。内実は薄れても習俗や用語は残る。当面の「雨乍見」もその一例だったのでなかろうか」とも言っており、実在していた可能性を排除しているわけではない。

しかし、『万葉集』における雨夜の歌や「雨障」の用例などを検討した工藤力男によると、「雨夜の逢会の禁忌という言説は成り立たない」¹¹⁾という。それは平安時代の貴族社会においても同じであると印象を拭えない。管見に入った平安朝の仮名散文に散見される用例を見る限り、雨夜の逢会を禁忌とする用例は見当たらない。むしろ、雨夜における男の来訪をめぐり、男女の思いの違いを見ることができるのである。

そこで、本稿では平安朝の仮名散文に散見される雨夜の逢会を平安朝の恋愛文化という側面から考えて行きたい。というのは、雨が降る中で女のところへ行く男の思いと、雨が降る中で男の来訪を待つ女の思いとは、微妙なずれが見られるからである。

2. 男女間の認識の差

『伊勢物語』の107段は『古今集』の617番歌と705番歌とを下敷にしており、雨と「つれづれ」における男女間の認識の差を知ることができる段である。

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案をかきて、書かせてやりけり。めでまどひにけり。さて男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし^①
返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ
といへりければ、男いといたうめでて、いままで、巻きて文箱に入れてありとなむいふなる。
男、文おこせたり。得てのちのことなりけり。「雨のふりぬべきになむ見わづらひはべる^②。
身さいはひあらば、この雨はふらじ」といへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらず。

かずかずに思ひ思はず^③問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる
とよみてやれりければ、みのもかさも取りあへて^④、しとどにぬれてまどひ来にけり^⑤。¹²⁾

(107段・「身をしる雨」・205～207頁)

11)工藤力男(1997.4)「く月夜の逢会・雨夜の禁忌」考『国語国文』66-4、50頁。

12)『伊勢物語』の本文引用は、福井貞助校注・訳(1999)の新日本古典文学全集本(小学館)による。なお、以下すべての引用文における下線と数字は論者のものである。

敏行は下線部①において「雨のせいで女に会いに行けない」としているし、下線部②においても「雨が降りそうなのでどうしようか迷っている」としており、女のところへ行けないのが雨のせいであるかのようなことを滲ませている。下線部①における「つれづれのながめ」を「あなたに逢えなくてぼんやり物思いにふけて夜を明かしてしまつたと、女にうったえるものである。そういう状態」¹³⁾と取る見解もある。もちろん、男はそのつもりで手紙を贈つたのであるだろう。しかし、そういうふうには受け取ってくれない下線部③の女の方からの和歌を見て、下線部④にあるように敏行は雨が降るにも拘らず蓑も傘も付けずに¹⁴⁾、下線部⑤にあるように女のところへやってきたのである。

ここで「雨夜の逢引は禁忌」とする説への疑問が生じてくる。あれほどの色好みの男（「例の男、女にかはりてよみてやらす」とあることから在原業平でろうー筆者注）が詠んだ歌には「雨夜の逢引は禁忌」への憚りもなく、女の身の上ばかりを心配していることである。そして、敏行が雨について「蓑も傘も用意するいとまもなく」訪れたことである。習俗が実在しなくても、「内実は薄れても習俗や用語は残」っているのであれば、このようなことがありうるであろうか。それよりは代作とは言え、敏行が雨を理由にして訪れないのを詰ること、それに応じて訪れたことを重視すべきではなかろうか。つまり、「雨夜の逢引」において、男には雨の中をついてまで行きたくはないという、女は雨の中をついてまでも訪れてほしいという心理が働いていると言えるのではないだろうか。

このような視点に立つと、『伊勢物語』に続く『大和物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』などに出てくる「雨夜の逢引」における男女の心理、ひいては平安朝の恋愛文化の一断面を窺うことができるだろう。

3. 男の思い

雨夜の来訪と不来訪とをめぐる用例における男の心理を読み取ってみよう。『大和物語』では、雨夜の来訪と不来訪とをめぐる用例が3例数えられる。

また、としこ、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ①、来ざりけり。こぼれこぼれたる家にて、いといたくもりけり。「雨のいたく降りしかば、えまみらずなりにき②。さ

13)古橋信孝(1990.5)「雨夜の逢引(下)」『月刊 言語』19-5、13頁。

14)雨夜の外出に傘を差すことについては、二通りの説に分れる。「神の目をはばかって、男は雨にそば濡れながら忍んで行かなければならなかったであろう」(注4に同じ。69頁)とする説と、「雨の外出は禁忌であるといっても、このような姿をすれば可能だった」(古橋信孝(1990.4)「雨夜の逢引(中)」『月刊 言語』19-4、13頁。)とする説である。そもそもこのような逃げ道があるのであれば、「つれづれのながめ」というのはなかったのであろうから、紹介に止めておく。

るところにいかにものしたまへる」といへりければ、 (67段・「雨もる宿」・298頁)

おなじ女、内の曹司にすみける時、しのびて通ひたまふ人ありけり。頭なりければ、殿上につねにありけり③。雨の降る夜、曹司の菰のつらに立ち寄りたまへりけるも知らず、雨のもりければ、むしろをひきかへすとて、

思ふ人雨と降りくるものならば④わがもる床はかへさざらまし
となむうちいひければ、あはれと聞きて、ふとはひ入りたまひにけり⑤。

(83段・「わが守る床」・308頁)

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条のわたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば⑥、五間ばかりなる桧皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。15)

(173段・「五条の女」・417～418頁)

67段は、女は千兼の訪れを待っているのであるが、当の千兼は下線部①と②とにあるように雨を理由に訪れてこなかった用例である。「夫が夜がれの理由にあげる第二は天候で」、そのなかで「雨が訪れないことの口実となる頻度において最高を占める」16)ということもあるだけに、不來訪の理由を雨としているところが前記の敏行に似ていると言えよう。

ところが、83段における人目を忍んで通う男は雨の夜女の局を訪れる。しかも下線部④の「恋しく思う人が雨となって降ってきてくれるのであれば云々」の歌を聞いて、下線部⑤のように「あわれを感じ、ふと中へ入ってしまった」のである。この用例では、下線部③の「頭なりければ、殿上につねにありけり」という叙述が注目を引く。それは人目を忍んで通っていたとは言え、不來訪が続いていたことを意味するのではなからうか。というのは、雨の降る時わざわざ訪れたというような呼吸としても解釈できるからである17)。

そして、173段は良岑の宗貞の少将があるところへ行く途中、雨がひどく降ってきたので荒れた宿に入る用例である。偶然の雨宿りで思いがけず女に出逢うという展開となっており、むしろ雨のおかげで結ばれた物語であると言えよう18)。

さて、「雨夜の逢引」といえば、『落窪物語』が印象的と言えよう。道頼が落窪の姫君のところへ通い始めた初日から3日目の夜まで雨が降っていたのである。特に3日目の

15)『大和物語』の本文引用は、高橋正治校注・訳(1999)の新日本古典文学全集本(小学館)による。

16)今井源衛(1978)「王朝のそらごと」『論叢王朝文学』笠間書院、452頁。

17)これについては、第4節で触れることにする。

18)林田孝和(注4に同じ。79頁)は「農耕に直接たざわることのない王朝貴顕の物語『源氏物語』にあっても、雨夜の交合を禁忌とする長雨忌みの習俗は確かに息づいていたがために、雨夜の恋は成就しえないのである」とする。しかし、この『大和物語』173段と後述する『落窪物語』の用例は、王朝貴顕にとっては当てはまらないよい反証になるだろう。

夜は結婚成立という大事な時であるだけに、土砂降りについて落窪の姫君のところへ行き、結婚が成立までの過程は「雨夜の逢引」を考える上で様々な示唆を与えてくれる。

㊦暗うなるままに、雨いとあやにくに、頭さし出づべくもあらず。少将、帯刀に語らひたまふ。「口惜しう。かしこにはえ行くまじかめり。この雨よ①」とのたまへば、「ほどなく、いとほしくぞ侍らむかし。さ侍れど、あやにくになる雨は、いかがはせむ。心のおこたりならばこそあらめ②。さる御文をだにものせさせたまへ」とて、19) (巻之一・58～59頁)

㊧いでや、『降るとも』と言ふこともあるを③、いとどしき御心さまにこそあめれ。(巻之一・59頁)

㊨「なほよろしう降れかし。折憎くもおぼえはべるかな」と言へば、「降りぞまされる④」と忍びやかに言はれてぞ、(巻之一・61頁)

㊩かかる雨に、かくておはしましたらば、御志を思さむ人は⑤、麝香の香にも嗅ぎなしたてまつりたまひてむ。(巻之一・63頁)

㊪身をしる雨のしづくなるべし
とのたまへば、「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ⑥」とて臥したまひぬ。(巻之一・65頁)

㊫「かばかりの御志は今も昔もあらじ⑦。〈類なし〉とは思ひきこえたまふや」と言へば、(巻之一・66頁)

㊬「まめやかに、今宵おはせざらましかば、いみじからまし⑧」など言ひ寝に寝ぬ。(巻之一・67頁)

引用文の㊦は、3日目の夜の土砂降りの中、道頼と帯刀が落窪の姫君のところ行くべきかどうかを話し合っている場面である。下線部①のように「姫君のところへ行けないとする」道頼と下線部②のように「あいにくの雨だからどうしようもない」とする帯刀の会話は、前述の『大和物語』67段の千兼という男と同じ認識であると言えよう。道頼の気持の不実ではないので、「かうわりなかめればなむ。心の罪にあらねど、おろかに思ほすな」(巻之一、59頁)という手紙を贈るわけである。

ところが、道頼と帯刀からの手紙を見たあこぎは下線部③のように「古人は雨にもかかわ

19) 『落窪物語』の本文引用は、三谷栄一・三谷邦彦校注・訳(2000)の新日本古典文学全集本(小学館)による。以下、新日本古典文学全集本による本文引用の場合は『新全集』と略称する。

らず逢いに来たのに」という返事をする。これは、新全集の頭注の指摘にあるように20)、
「降るとも」は『万葉集』の664番歌の引歌表現であり21)、少将の薄情へのあこぎの恨
み言である。この「雨にもかかわらず逢いに来た」というあこぎの認識に注意する必要がある。
第4節で述べる「女の思い」の先駆けで、『大和物語』67段の従順などしことは違
うからである。

さて、一人でも徒歩で行くという帯刀に誘われたかのようにして道頼も落窪の姫君のところ
へ向かうことになるわけであるが、数々の苦難を乗り越えて訪れてくる道頼一行のことを知ら
ない落窪の姫君の独り言が引用文㉓の④である。『新全集』は、「降りぞまされる」は
『古今集』617番の引歌で、この場面は前掲の『伊勢物語』107段が典拠であり、
『伊勢物語』をパロディー化したもので、この物語の色好み批判の一つと考えられるとい
う22)。

また、雨が降るといふ「平安朝物語ではありふれた設定」ではあるが、「類型に変化を
持たせ、特性を出そうとしている」23)という『新全集』の頭注解説のとおり、「雨夜の逢
引」を考える上で〈男の思い〉と〈女の思い〉という面でも様々な示唆を与えてくれる。

引用文㉔の⑤に「このような大雨の時、このように苦勞をしていらっしやうならば、愛情
をお感じになる人は」とあり、引用文㉕の⑦に「これほどの志は今も昔もあるまい」とあるよ
うに、男の雨夜の訪れは女にとって愛情を感じる行為であることが見て取れよう。このようなこ
とは、引用文㉖の⑥において「このように深く愛されていることがおわかりになるでしょう」と道
頼をして言わせているので、男たちも承知していたということになるだろう。そして、引用はし
ていないが、巻二において道頼は右大臣の姫君との縁談が持ち込まれたことで物思いに
耽っている落窪の姫君を相手に、三日夜のことを言いながら自分の愛情が深いことを主張
しているのである。

また、帯刀に言わせたことではあるが、「もし今夜いらっしやうなかったら、どんなにつら
かったでしょうに」という引用文㉗の⑧表現は雨夜における男の不来訪への〈女の思い〉
を知ることができる大切な用例である。

長々と「雨夜の逢引」の用例を検討してきたわけであるが、『大和物語』67段の用例
では雨を不来訪の理由として挙げており、『古今集』617番歌における藤原敏行に似てい
ると言えよう。このようなことは、『落窪物語』の引用文㉘の道頼と帯刀の会話においても

20)三谷栄一・三谷邦彦校注・訳(2000)前掲書の頭注24。59頁。

21) 大伴宿禰像見歌一首

石上 零十方雨二 将、関哉 妹似相武登 言義之鬼尾 (巻第四、664)

なお、『万葉集』の本文引用は、小島憲之他校注・訳(1994)の新日本古典文学全集本(小学館)によ
る。

22)三谷栄一・三谷邦彦校注・訳(2000)前掲書の頭注23。61頁。

23)三谷栄一・三谷邦彦校注・訳(2000)前掲書の頭注解説。61頁。

確認することができた。

一方、引用文㉔㉕㉖においては訪れてきた男の愛情深さ、引用文㉗㉘においては男の来訪を待つ女の切実な思い、引用文㉙においては雨を理由に男が訪れてこなかった時の女の辛い思いを確認することができた。

それでは、このような引用文㉗㉘における女の思いや、男の立場からではあるが㉔㉕㉖㉙における女の思いは、平安時代という貴族社会においてどれぐらい普遍的なものであったかを第4節で検討していきたい。

4. 女の思い

雨夜に訪れに関して、男への感想が述べられている平安朝の仮名散文の作品としては、『蜻蛉日記』と『枕草子』とを挙げることができよう。『蜻蛉日記』における道綱の母の思いをみてみよう。

今日の昼つかたより、雨いといたうはらめきて、あはれにつれづれと降る。まして、もしやと思ふべきこともたえにたり①。いにしへを思へば、わがためにしもあらじ、心の本性にやありけむ、雨風にも障らぬものとならしたりしものを②、今日思ひ出づれば、昔も心のゆるふやうにもなかりしかば、わが心のおほけなきにこそありけれ、あはれ、障らぬもの見しものを、それまして思ひかけられぬと③、ながめ暮らさる。

雨の脚おなじやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。あはれ、をかく来たるは」と、わきたぎる心をばかたはらにおきて④、うち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざめりしものを⑤」と言ふにつけてぞ、うちこぼる涙のあつくてかかるに⑥、おぼゆるやう、

思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにざりける

と、くりかへし言はれしほどに、寝るところにもあらで、夜は明かしてけり。24)

(中巻・天禄元年11月～12月・215頁)

上記の引用文は、道綱の母が雨の悪天候について自分のところへ通っていた兼家のことを回想している場面で、雨夜の兼家の来訪への様々な思いが綴られている。兼家の来訪への望みを捨て切れなかったらしく、下線部①では「このような雨ではまして、もしかしたら来るかもしれないという思いも絶えてしまった」と思って、下線部②では「雨風にも負けず訪れ

24) 『蜻蛉日記』の本文引用は、木村正中・伊牟田経久他校注・訳(2000)の新日本古典文学全集本(小学館)による。

てくれたのは私への愛情からではなく、生まれつきの好き心からだったのかしら」と思い、自分の望みが分に過ぎていたのだったと反省する。その反省からもう一度、下線部③のように「兼家の訪れを雨風にも負けずものと思っていたが、もはや期待できない」と思い、物思いに沈んでしまう。この場面については「詠嘆的な繰り返し。昔の愛情も幻想に過ぎなかった。そのむなしさが今の絶望感に重なっていく」²⁵⁾と言われているが、幻想ではあっても昔は自分への愛情だと思っていたということは動かないだろう。そして、下線部⑤においては、自分の気持をよく知っている侍女をして、兼家が「昔はもっとひどい雨風にも負けず訪れてくれたのに」と駄目を押している。

ところで、ここで注意しておきたいのは、雨の悪天候について南面の妹のところに訪れてくる人の足音を聞いて、下線部④のように「煮え返る心はさしおいて」と叙述していることである。そして、自分の気持をよく知っている侍女の言葉を聞いて、下線部⑥のように「涙が熱くあふれ出た」とも叙述している。

ただし、雨夜に訪れてこない兼家への理解を示している記述も見られる。

しばしありて、にはかにかい曇りて、雨になりぬ。たふるるかたならんかしと思ひ出でくながむるに、暮れゆく気色なり。いといたく降れば、障らむにもことわりなれば①、昔はとばかりおぼゆるに、涙のうかびて、あはれにもののおぼゆれば、念じがたくて、人出だし立つ。

(中巻・天禄2年11月～12月・266頁)

下線部①の「とてもひどく降るので、この雨に妨げられて来ないのも無理ではない」とあるように、上記の天禄元年の記事とは打って変わっていることが知られる。鳴滝籠りを前後にしたということもあって、かなりの変化である。この辺りの変化について「「雨風に障る」ことをも甘受し得る、「のどか」な諦観」²⁶⁾という指摘もあり、兼家に執着していた道綱の母が雨夜の訪れで愛情の深さを測ろうとしたのは若かりし日の情熱の裏返しと言えるかも知れない。

さて、このような諦観までとは言えないかも知れないが、醒めた認識の持ち主が清少納言であると言えよう。

「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし①」とは、などて言ふにかあらむ②。さあらむを、昨夜も、昨日の夜も、そがあなたの夜も、すべてこの頃うちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ雨にさはらで来たらむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめりと、あはれなりなむ③。さらで、日ごろも見えず、おぼつかなくて過ぐさむ人の、かかるをりにしも来むは、さ

25) 木村正中・伊牟田経久他校注・訳 (2000) 前掲書、頭注15、215頁。

26) 内野信子 (2003.3) 「『蜻蛉日記』における「雨」「のどか」をめぐって」『日記文学研究誌』5号、10頁。

らに、心ざしのあるにはせじとこそ、おぼゆれ④。人の心々なるものなればにや⑤。物見知り、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどを語らひて、あまた行く所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげくも見えぬを、なほさるいみじかりしをりに来たりし、など、人にも語りつがせ、ほめられむと思ふ人のしわざにや⑥。(中略)

雨は、心もなきものと思ひしみたればにや、かた時降るもいとにくぞある。やむごとなき事、おもしろかるべき事、尊うめでたかべい事も、雨だに降れば、言ふかひなくちをしきに、何かその濡れてかこち来たらむが、めでたからむ⑦。交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。昨夜、一昨日の夜もありしかばこそ、それをもかしけれ⑧。27)

(第274段・成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて・425～428頁)

下線部①は「雨がひどく降る日にやってきた人は、素晴らしい。日頃はっきりしなくてくるしいこともあるとしても、濡れてやって来るならば、つらいこともすっかり忘れてしまうに違いない」と語り合う女房たちの雨夜の来訪への評語である。ここには今まで見てきた愛情の深さとあまり変わらないと言えよう。しかし、下線部②の「どうしてそんなふうに言うのだろうか」という疑問が提示された後、「そうではあるが」と肯定してから清少納言の独特な評語が展開しているのである。

下線部③に「頻繁に訪れる男がひどい雨に負けずにやって来る場合は女も感心するに違いない」とあるように、愛情の深さが感じられるのは誠実に訪れていた男が雨の日やって来る時であるという見解を示している。

続いて下線部④に「日頃は訪れなくて、女が不安に思って過ごすような男が雨のひどい時に限ってやって来るということは、本当に志があるとはできまい」とあるように、第2節で取り上げた『大和物語』83段のように、日頃は隔てていた男が雨夜にやって来るのはあまり感心できないということになるだろう。

さらに、下線部⑥に「ほかにたくさんの通い所もあり、またほんさいなどもあるので、頻繁に訪れもしなかったのに、ひどい雨の折りにやって来たなどと、人に語り継がせ、誉められようとする男の仕業であろう」とあるように、まるで男の胸の内を覗いているような見解を示している。男の来訪に頼らざる得ない平安朝の女の評語としてはかなり醒めた認識であると言っても過言ではあるまい。このような醒めた認識があったからこそ、下線部⑧の「交野少将を非難した落窪少将などは素晴らしい。3日続けてやってきたのだから素晴らしいのだ」のような評価ができたのだろう。

以上の清少納言の評語をまとめると、男がひどい雨の折りにやって来る行為は愛情の深さからであるというふう捉えていた以前の認識と変わりはない。しかし、そこには、日頃から誠実に通っていた男がひどい雨にも負けずやって来た時だけであるという前提がついている

27) 『枕草子』の本文引用は、松尾聡・永井和子他校注・訳(2002)の新日本古典文学全集本(小学館)による。

のである。さらに、もう一つ付け加えるべきは、下線部⑦の「濡れて愚痴をこぼしながらやって来ては駄目」ということである。

さて、清少納言のいう愚痴とまではいかないが、第5節では女に対して自分の誠実ぶりをアピールする手段として用いられる用例を検討していきたい。

5. 口説き文句としての変奏

『源氏物語』では、雨の時の男の訪れはあっても、土砂降りの中での男の訪れが叙述される場面はない。したがって、雨夜の訪れへの男女の思いも叙述されることがない。ただし、男は雨が少しばらつく時か、五月雨の時でもちょっとした晴れ間に訪れる。次の引用文は、光源氏が須磨から帰還してからはじめて花散里を訪れる場面である。

五月雨つれづれなるころ①、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。(中略)
 女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸には夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて②、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。²⁸⁾ (濔標・297～298頁)

下線部①に「五月雨の人恋しい頃」²⁹⁾とあるのに、花散里の部屋に立ち寄る時は下線部②のように「月がおぼろに差し込んで」とあるので、雨は上がったのである。このように、長雨の時でも晴れ間の訪れなので、雨夜の訪れへの男女の思いが語られないのである。代わりに雨の晴れ間に加えて「露けき」も用いられている。次の引用文は、花散里のことを思い出して出かける頃の天候である。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかききほどに月さし出でたり。
 (蓬生・344頁)

下線部のように、幾日か続いていた雨が少しばらついていたと描写されている。しかし、花散里のところ行く途中で、荒れ果てた末摘花の邸を通りかかることになる。続いて、末摘花の邸へ入る場面でも、「雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば」(蓬生・344頁)と、ばらつく雨が用いられている。このようにして末摘花の邸へ入ってから末摘花と対

28) 『源氏物語』の本文引用は、阿部秋夫他校注・訳(1999)の新日本古典文学全集本(小学館)による。

29) 『新全集』の現代語訳は、「五月雨の所在ないころ」としているが、「つれづれ」を単なる「所在なさ」と解するのには首肯しかねる。引用はしていないが、花散里への思いが叙述された後なので、「人恋しいころ」と解すべきであると考えている。

面する場面が次の引用文である。

かくばかり分け入りたまへるが浅からぬ①に、思ひおこしてぞほのかに聞こえ出でたまひける。「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず、また変らぬ心ならひに、人の御心の中もたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどをいかが思す②。年ごろの怠り、はた、なべての世に思しゆるすらむ。今より後の御心になはざらむなん、言ひしに違ふ罪も負ふべき」など、
(蓬生・350頁)

下線部②にあるように、末摘花へ入る前からして、2例の「露けさ」と4例の「分け入り」が用いられている。「分け入り」³⁰⁾は、『源氏物語』には12例が数えられ、語義的には荒れた「葎の門」の露や生い茂った草や雑然とした物などをかき分けながら進んでいく動作を表わす言葉である。『源氏物語』では、「葎の門」への「分け入り」が厚意のある「心ざし」から発せられた行動であるというふうに使われている。上記の引用文でも末摘花の心情に沿った地の文（下線部①）と、光源氏自身が末摘花へ訴える文句（下線部②）として用いられているのである。この場面と仕組みが同じであるのが、次の引用文である。

庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いともあはれに露けくて、分け入りたまふ。
(柏木・336～337頁)

上記の引用文は、柏木が死んだ後、夕霧が致仕の大臣を慰問してから再び一条宮邸を訪れる場面である。柏木が死んでから荒れ果てた一条宮邸に夕霧が慰問の形として入っていく場面で、下線部にあるように「露けく」と「分け入り」が用いられている。また、「分け入り」の行為をわかってほしいと訴えるのが、次の場面である。

「なほ近くてを。な放ちたまひそ。かく山深く分け入る心ざしは、隔て残るべくやは。霧もいと深しや」とて、わざとも見入れぬさまに山の方をながめて、「なほ、なほ」と切にのたまへば、
(夕霧・449頁)

「露けさ」から「山深く」へと、訴える相手が落葉宮ではなく小少将というふうに変奏してあるけれども、前述した光源氏の場合の仕組みと同じであると言えよう。

もう一つの用例が、第3部の薫の場合である。

30) 拙稿(2005.10)「葎の門」の「つれづれ」『古代文学研究(第2次)』第14号、古代文学研究会、64頁。

御心地にも、さこそいへ、やうやう心静まりて、よろづ思ひ知られたまへば、昔ぎまにても、かうまで遙けき野辺をわけ入りたまへる心ざしなども思ひ知りたまふべし、すこしみざり寄りたまへり。
(椎本・197～198頁)

上記の引用文は、八宮が亡くなった後も慰問し続ける薫を大君が応接する場面で、下線部は語り手による推量である。直前の場面で薫は、決まり悪さを覚え答さえない大君を相手に「なよび気色ばみたるふるまひをならひはべらねば」(椎本・197頁)と言いながら、女房を介さずお話をしたいと迫っていた。それに応じて「すこしみざり寄る」大君の行動に対し、「厚志などもよくおわかりになるのでしょうか」という推量である。つまり、大君の行動は「分け入り」した薫の「心ざし」が深いものであると解してのことだろうと推量しているのである。

また、薫も光源氏と夕霧のように、女(大君)に訴える場面において「分け入り」を用いている。

「山路分けはべりつる人は、ましていと苦しけれど、かく聞こえうけたまはるに慰めてこそはべれ。うち棄てて入らせたまひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ。
(総角・234頁)

下線部のように、「露けさ」や「山深く」から「山路」へと、「分け入り」から「分け」というふうに変奏してあるけれども、前述した光源氏と夕霧の場合の仕組みと同じであると言えよう。

このように『源氏物語』では、「雨夜の訪れ」で愛情の深さを主張するという形より、「葎の門」や「山深く」「山路」といった特殊な所へ「分け入る」行為をもって厚志を主張するという形に変奏しているのである。

「分け入り」をした光源氏や夕霧や薫は『源氏物語』の第1、2、3部において、それぞれの恋物語を展開する主人公であるだけに、『源氏物語』の作者の発想は特異なものであると言えよう。

物語において、「葎の門」や「山深く」「山路」といった特殊なところは、男にとって「荒れた家に美女を発見する浪漫的な場所」³¹⁾であった。ただし、光源氏や夕霧や薫は、それを逆手にとって「分け入り」した自分達の行為を厚志として受け止めてほしいという口説き文句として使っていたとも言えよう。ここで清少納言の「人の心々なるもの」(第274段・成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて・425頁)という見方を借りると、両親がいなく

31)石井正己(2000.7)「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに一昔物語を追体験する」『国文学』45-9、学灯社、38頁。

て光源氏と薫の経済的な援助を必要とする点で共通している末摘花と大君の場合は明暗が克明に分れたのであるから、口説き文句としては有効だったのかどうか判断しかねるところである。

6. まとめ

以上のように、平安朝の仮名散文中に散見される雨夜の逢会について、平安朝の恋愛文化という側面から検討してきた。

折口信夫から端を発し「雨夜の逢引の禁忌」とする説は、平安朝の仮名散文作品に限って言えば、当てはまる用例を見出すことができない。その理由として考えられるのは、平安朝の仮名散文作品に登場する主人公やその享受層は貴族社会に生きる人たちで、折口信夫の言う農耕社会とは縁の遠い存在だったからではないだろうか。

さて、平安朝の仮名散文作品における「雨夜の逢引」の用例をみていくと、雨夜の男の訪れを男の愛情の深さ所以の行動として捉える傾向が顕著であると言える。男の来訪を待つことしかできない平安朝の女性にとっては、ひどい雨にも負けず訪れてくれたことに深い愛情を感じていたということなるだろう。特に、『落窪物語』において雨の中で3日も通い続けた道頼の行為は時代を隔てて『枕草子』に高く評価されているくらいである。『枕草子』の評語を借りると、夜がれをしていた男が雨の時訪れてくるのは普通の女にとって感心することかも知れないが、普段からまじめに通っていた男の雨夜の来訪に価値があるということになるだろう。

ただし、枚数の都合上本論で引用することはできなかったのであるが、『落窪物語』の3日目の夜の場面は、雨夜の訪れがどれだけ大変であったかを如実に示すものであった。それを知ってか知らずか、『蜻蛉日記』の作者である道綱の母は夫の兼家への執着から目が醒めた時、ひどい雨で訪れないのも無理ではないという見方をも示していた。

なお、『源氏物語』は他の作品とは違って、雨夜の来訪は叙述してあっても、それに対する男女の思いが示されている用例は見当たらなかった。代りに、「葎の門」や「山深く」「山路」といった特殊なところを「分け入」る行為をもって厚志を主張するという形に変奏していたのである。

【参考文献】

- 阿部秋夫他校注・訳 (1999) 『源氏物語』小学館。
- 池田弥三郎 (1966) 「雨の詩恋の歌」『文学と民俗学』岩崎美術社。
- 石井正己 (2000.7) 「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに一昔物語を追体験する」『国文学』45-9、学灯社。
- 今井源衛 (1978) 「王朝のそらごと」『論叢王朝文学』笠間書院。
- 内野信子 (2003.3) 「『蜻蛉日記』における「雨」「のどか」をめぐる」『日記文学研究誌』5号、日記文学研究会。
- 折口信夫 (1965) 「古代民謡の研究」『折口信夫全集』第1巻、中央公論社。
- 川村幸太郎 (1983.7) 「「雨障」と「雨乍見」」『日本文学誌要』第28号、法政大学国文学会。
- 木村正中・伊牟田経久他校注・訳 (2000) 『蜻蛉日記』小学館。
- 工藤力男 (1997.4) 「〈月夜の逢会・雨夜の禁忌〉考」『国語国文』66-4、京都大学国文学会。
- 小島憲之他校注・訳 (1994) 『万葉集』小学館。
- 鈴木日出男 (1995) 「雨」『源氏物語歳時記』ちくま学芸文庫。
- 高橋正治校注・訳 (1999) 『大和物語』小学館。
- 都基弘 (2005.10) 「「葎の門」の「つれづれ」」『古代文学研究 (第2次)』第14号、古代文学研究会。
- 西村亨 (2000) 「王朝びとの夏」『王朝びとの四季』第19刷、講談社。
- 林田孝和 (1967.8) 「源氏物語における「月光」の設定 (二)」『国学院雑誌』68-8、国学院大学。
- _____ (1980) 「「ながめ」文学の展開」『源氏物語の発想』桜楓社。
- 福井貞助校注・訳 (1999) 『伊勢物語』小学館。
- 藤岡忠美 (1976.6) 「長雨」『国文学』21-7、学灯社。
- 古橋信孝 (1990.3) 「雨夜の逢引 (上)」『月刊 言語』19-3、大修館書店。
- _____ (1990.4) 「雨夜の逢引 (中)」『月刊 言語』19-4、大修館書店。
- _____ (1990.5) 「雨夜の逢引 (下)」『月刊 言語』19-5、大修館書店。
- 松尾聡・永井和子他校注・訳 (2002) 『枕草子』小学館。
- 三谷栄一・三谷邦彦校注・訳 (2000) 『落窪物語』小学館。

要 旨

本稿では、平安時代の生活文化のりかひのため、「雨夜の逢引」を取り上げた。折口信夫の「雨夜の禁忌」という説に影響を受けた「雨夜の逢引の禁忌」とする説を立てるために、平安朝の仮名散文作品から用例を求めることは無理であること述べた。その理由としては、平安朝の仮名散文作品に登場する主人公やその享受層は貴族社会に生きる人たちで、折口信夫が「雨夜の禁忌」で言っている農耕社会とは縁の遠い存在であることを挙げた。

平安朝の仮名散文作品においては「雨夜の逢引」の用例が容易に見出せ、雨夜の男の訪れを男の愛情の深さとして捉える傾向が見られる。平安朝の女性は、男の来訪を待つことしかできないので、ひどい雨にも負けずに訪れてくれた男に深い愛情を感じていたかもしれない。特に、『落窪物語』において雨の中で3日も通い続けた道頼は時代を隔てて『枕草子』に高く評価されていた。しかし、むやみに感心するのではなく、夜がれをしていた男が雨の時訪れてくるのは普通の女にとって感心することかも知れないが、普段からまじめに通っていた男の雨夜の来訪に価値があるという清少納言の醒めた評語は注目に値する。

『蜻蛉日記』の作者である道綱の母の場合、夫の兼家に執着していた時は雨夜の不来訪を恨んでいたのであるが、夫への執着から目が醒めた時はひどい雨で訪れないのも無理ではないという見方をも示していた。

なお、『源氏物語』は他の作品とは違って、雨夜の来訪は叙述してあっても、それに対する男女の思いが示されている用例は見当たらなかった。代りに、「葎の門」や「山深く」「山路」といった特殊なところを「分け入」る行為をもって厚志を主張するという形に変奏していたのである。

キーワード：平安朝、仮名散文、女性、雨夜の逢引、口説き文句、分け入り

투 고 : 2009. 11. 30
1차 심사 : 2009. 12. 12
2차 심사 : 2010. 01. 09